



第 22 回勉強会「英語の教え方教室」 5 月 18 日(土)

■ 「生徒の意欲を引き出すメンタルトレーニング」

大阪府立枚方津田高等学校 久保田 親夫 教諭



最近、意欲があまり見られない生徒が多くなったと聞く。昔と比べ、押し寄せる情報の渦の中、選択の自由も格段に増えたが、自由が増えるほどに判断を迫られる量も増え、生きる課題も一層複雑になっている。高まる不安に学習意欲も失いがちになるのだろうか。そこで今回は、英語の授業発表でなく、生徒の意欲を引き出すメンタルトレーニング講習を大阪府立津田高等学校の久保田先生にお願いした。21 名参加の体験型のワークショップ講習をかいつまんでまとめる。

1. 導入活動

・指がくっつく

人差し指だけを両方立てて、あとは左手右手の指を組むようにして手を合わせる。立てた両人差し指の隙間が少しずつ狭まってくっつくよと言うと次第にくっつく。力が入るとくっつきやすい。



・手が大きくなる・小さくなる

両手首の横の筋を合わせるように両手を重ねる。すると右手、もしくは左手のどちらかの指先が少し高くなっている。少し低かった方の手のひらの真ん中のツボもう片方の手でぐりぐり押しで大きくなあれと呪文をかけてもういちどやると呪文を欠けた手のほうが高くなっている。

2. Oリングシリーズ

Oリングとは、親指に先の腹と人差し指(中指)の先の腹とをしっかりとくっつけて「O」の字を作る。この O のリングにパートナーが同様に両手で作った Oリングを入れて最初の人しっかりとくっつけて維持しようとする Oリングを離すことを基本活動とする。どのようなときにこの Oリングはもろく、どのようなときに強固なリングになるかを実験する活動である。

方法としては、二人で行い、まず、あなたが右手の親指と人差し指で『輪』を作って、残りの3本の指は自然に伸ばす。もう一人の方に、同じように指で輪を作り、鎖のように繋ぐ。そして、左右に引っ張って輪を開けてもらう。その時、輪が開かないように指先に力をこめる。この時のあなたの指の力の入り具合で検査、確認をする。自分にとって健康で安全なものだと、なかなか輪が開かなくなり、逆に害のあるものだと不思議なことに、輪が簡単に開いてしまう。

(1) 「しんどいね」「がんばったね」指の輪が強いのは？

「しんどいね」「つかれているね」とパートナーに言われたあとには指の輪の力は弱いが、「がんばろう」「がんばったね」「できたじゃない」と言って誉められると指の輪が強くなるということをペアで体験した。

授業や HP での指導ポイント：

「無理」「いやだな」「自分はだめだ」は敵！生徒の能力を否定することばは生徒のエネルギーを低下させる。

(2) 先にきちんと礼をする方が指の輪は強い

パートナーと礼をして指の強さを確かめるのであるが、相手が礼をしたあと自分が礼をして確かめる指の輪の強さと、自分の方が先に礼をして相手がそのあとに礼をした場合の指の輪の強さでは先に礼をする方が指の輪は強くなっている体験をする。

授業や HP での指導ポイント：

「起立」「礼」「着席」きちんと行動する人にはエネルギーが宿る。

3. 集中カード(集中力アップ① 計算問題で確認)

最初に計算テスト計算方法を説明し、トレーニング前の計算問題を1分間行う。(できた数を記入。)次に集中カード(残像カード)の中央の黒い点を20秒間凝視。軽く目を閉じると色が反転し



(補色が)見える方が多い。それを1分間見続ける。1度消えても再度見えてくる。目を開けずに見ようと努力し続ける。記録用紙に何秒間くらい見えたか記入。これを計3回繰り返す。その後で計算問題をもう一度行う。集中力が増したのか、驚くほど計算力が伸びている。集中力カードを授業で有効活用すれば、生徒の成績も伸びる。

4. 人間持ち上げ法(同調法+イメージ)

4人の手の指先で大人を持ち上げることができる。持ち上げる4人に「元気ですね」と声をかけ、4人が同調して手拍子(タタタタタタ)を打ち、イエイとかけ声をかけたあと、4人の指をわきの下とヒザの裏の4箇所に入れ、「せーの！」と声を合わせ持ち上げると、数秒間であるが、軽々と余裕で持ち上がる。ちなみに、最初に手拍子を合わせたりせず、普通にやっただけでは、重たくて全然持ち上がらなかった。なぜ指8本(4人の指2本づつ)で軽々とXキロを超える体重の人間が持ち上がるのか。不思議な体験であった。



授業や HP での指導ポイント：

クラスやチームが一同となっているか？みんなが一致して、調子を合わせる声を出すとエネルギーが増える！授業開始の挨拶をみんなで声を合わせる事も大切だと話す。



5. テニスボール積み(集中力アップ！)

用意していた硬式テニスボールを2個を縦に積み上げることに挑戦、集中力の高い人ほど早く積み上がる。できる人は3個積み上げられる。または2個の積み上げを横にもう1セット並列して積み上げることで集中力をアップする訓練をする。硬式テニスボールはボールの表面が摩擦力がある毛で覆われているので、最適の道具である。

参加者の中で2個積み上げを2セット完成した人がいた。私も1セットは積み上げ成功。なかなか集中力が要る。

授業や HP での指導ポイント：

集中力アップ訓練としてやってみる。



6. テニスボール回し

2人の場合：2ボール・3ボール

4人の場合：2種類、全員で

ペアでお互いのボールを投げ合って受け取る。これを30回連続でボールを落とさずにやれるかを見る。次に3人、4人でやっていく。はじめに時計回りで一斉投げ合って受け取ることを5回、次に反時計まわりで5回、次に時計回りで4回、次に反時計まわりで4回と回数を減らしていく。次に時計回りで3回、次に反時計まわりで3回、次に時計回りで2回、次に反時計まわりで2回、最後に時計回りで1回、これだけを一回も失敗せずにできれば終了。

参加者の皆さんは楽しくやっていたと同時に必死であった。うまくいかないチームは、かけ声を一斉にかけ合いを入れてやっていた。

授業や HP での指導ポイント：

チーム力のアップ！

他にペンドラムの活動など様々な活動を休憩を少し入れるだけで集中して行った。スーツケースにいっぱい小道具などを持参していただき、惜しみなく活動を紹介していただいた。ちょっと教室でやってみようと思うメンレの活動で、楽しい3時間であった。



第 23 回勉強会「英語の教え方教室」 6月 29日(土)

■「活用型学力を育てる授業をめざして—実践活動紹介—」  
 兵庫県立尼崎小田高等学校 二森 正人 教諭

今回は活用型の授業について、兵庫県立尼崎小田高等学校の二森先生に実践活動を話していただいた。滋賀県 I 高校で教員志望 3 年生女子生徒が参加するなど 17 名の参加であった。Provision 英語 II (桐原書店) lesson2 Tuvalu-Disappearing Islands の指導実践をもとに報告提案していただいた。



最初に、(1) 単語の英文定義 (2) 背景知識の提示 (3) 単語ペアチェック (英→日、日→英、日→英→スペル) について説明があった。

●英文定義例 (名詞、noun) : to work in pleasant (s) )  
 定義 : everything that is around or near somebody and something

●単語リスト一部例・ペアチェック

単語・熟語	品詞	意味
southeast	副詞	南東へ
cooperative	※名詞は？	協力的な
in the middle of ~		~の真ん中に

単語の英文定義は、新出単語中心に、ワードパズルをヒントにしながらかける活動であった。単語リスト表は教員から事前に生徒に配付するとのことであった。意味はいくつかを空所にして、生徒に埋めさせるものである。

単語の指導についてのグループ・ディスカッションを通して「生徒は英英辞典を持っていないので、最初に英英で単語を学ぶのは難しい」「単語のリストは事前に与えておかないと授業時に質問をしても黙っているだけで反応がない。だから私も事前に配って、即座に反応すること大切にしている」「英英の単語リストは授業終了時、教科書内容を理解した上での定着活動として行う方が効果があるのではないかな」などのコメントがあった。教員から単語リストを与えるのは、授業を自分のペースで進めたいという気持ちが教員に働いているのではないかな。プロセスカットをすると本当の学びにはならない。input 即 output という授業には学びはない。教材を摂取させ内在化するには intake が必要である。この内在化という思考のプロセスは生徒・学生にとっては learning であり、教員の立場からすれば teaching である。「空白の部分必ず添え、そこに生徒自身が調べたものを書かせることが必要では」という意見が出た。単語を教えるのか、語彙を増強するのが論点になった。羅列的に並べた単語のリストは、単語レベルの学習で、語彙レベルではない。語彙は語の集まりである。したがって、それぞれを表現の使用場面などで分類し、語と語が繋がったネットワークとして理解させることが大切である。単語の使われ方、いつどのように使うのか、なぜその語を使うのか、それぞれの単語の概念、イメージを知ることが必要で、逐語訳的な単語のリストは、本当の理解に繋がらず、固定化した日本語発想の意味の記憶になる恐れがある。また、まとめの作業として生徒に新出語など分類させ修得させたり、学習した単語を数個選びそれらの単語を使って 3~4 行のストーリーを書かせたりするのはどうだろうかというコメントが参加者からあった。

次に思考力・判断力を鍛える問いかけとして、①英問英答 (Fact Finding 中心)、②指示語が何を指しているか、③理解に必要な箇所を日本語訳、④教科書に記載されている事実などを表にまとめる⑤パラグラフの内容などを絵で表す (絵で表すことで、内容をより立体的に理解) ⑥同じ段落などで、言い換えられている表現や反対の意味の表現に着目して読む⑦内容を捉えて自分が表現できる英語で言い換えさせ、確かな内容理解を確認⑧英文の行間に着目し、筆者の気持ちを考えるなどの様々な内容理解の活動を報告された。

Questions Answers  
 How many islands does Tuvalu have? ( ) small islands  
 Land area ( ) km<sup>2</sup> How about Amagasaki?  
 3rd Paragraph What does "it" (P. 20 l. 17) refer to?  
 4th Paragraph "Consequently, as the tide rises, the land becomes filled with water like a sponge." を日本語に訳しなさい。  
 5th paragraph 本文の内容を絵で表しなさい。  
 6th Paragraph Until how long ago were they drinking the well water?  
 7th paragraph "their traditional way of life" はどんな内容ですか。

このように多岐にわたる活動を行うには相当の準備が必要であるでしょうと参加者からコメントがあった。アテンション・ポインターとして事前に配布して予習を促すということであった。生徒は確かに予習をし

てくるだろうが、与えられたものをこなすことに慣れて、自分で考えることが疎かになることが懸念されるとの意見もあった。絵を描かせる活動は、上手な生徒はいいが、苦手な生徒には苦痛になるかもしれない。何枚かの絵を用意しておき、それを順に並べさせどのような内容であったか記述させたり retell させたりするのはどうかと意見があった。英語の授業では、言語 (language) としての英語と内容 (content) としての英語の両方が大切である。昔からあったと思うが、最近注目されている CLIL (content and language integrated learning) にみられるように、言語形式がその内容を伝える機能をどのように果たしているのかを学びながら、内容の理解を深めることは必要である。「英語の授業は英語で行う」「日本語は必要な時しか使わない」が原則となったが、学校現場では訳読から脱却できない傾向がまだ残っている。英語と日本語は言語形式、発想も異なるので置き換えることは目標言語の学びに繋がりにくい。日本語に訳すること日本語を授業で使うことは同じではない。大切なことはいかに発問するかである。たとえば、テキストの fact-finding の回答を書かせる課題には、その fact がどのような意味合いを持つのか更に尋ねることである。fact-finding で終わってしまてはいけない。



そこで「2色マーカーで磨く読解力」という朝日新聞朝刊 (平成 24 年 10 月 17 日)「声」の欄に掲載されていた記事を私から紹介した。『私の一日は、新聞の斜め読みから始まる。(中略) 斜め読みのあと、グリーンとオレンジのマーカーを手にして、新聞を読み取る作業を開始する。選んだ記事について、「事実」はグリーンで、事実から導き出された「見解」や「主張」はオレンジで、文章に傍線を引く。重要な部分は枠で囲い、肝要な箇所や結論は塗りつぶす。この作業を通して、事実に基づいて考え、判断するスキルが磨かれる。(後略)』生徒自身に事実、意見を異なるマーカーで下線を引かせたり、生徒自身に何らかの観点を持たせて下線を引かせたりして、どのような根拠で下線を引いたのか、話し合わせたりすることも有効な指導である。

最後に、「見出しつけ&要約の活動」について、①パラグラフの見出しを書く② Part ごとに英語で要約する、「文法、重要表現練習」「音読」「Double Reading」について一気に話してもらった。

パラグラフの集合体にメッセージがあるので、パラグラフ毎に見出しをつけるのは簡単なことではない。トピックセンテンス等を見つけることでいいのではないかな、トランジションなどに注意し、それぞれのセンテンスがどうつながりを持っているか考えさせる事が大切ではないかなとの意見も出された。

文法の大切さを説明するには、『ドラゴン桜』の漫画を活用したりしているとのことであった。難しい内容を漫画で説明すれば分かりやすくなるとのことであろう。

音読については、学校では形式的な音読に流れている傾向があるかもしれない。「音読は習慣化されて学ばれる」ので文法の例文であろうと、いつでも音読をさせる必要があると参加者から意見が出た。

ダブル・リーディングの必要性は参加者ほぼ全員が必要とのことであった。二森先生はラダーブックなどの他の読み物を扱っている。参加者の多くは、他の教科書の類似した内容のレッスンを読ませるとのことであった。英字新聞の声の欄を使うという先生もいた。素材を得るには、普段から本を読み、資料収集することを心がけなければならない。ALT などの力を借りて、本文に反対する意見の英文を書いてもらったり、音声教材を作ったりすることなどを考える必要がある。

レッスンのまとめとしての活動には、生徒に英文表現をリサーチさせたり、学習したことをプレゼン発表させたり、本課の一番大切な文、印象に残った文などをリサーチさせて発表させる、本文の英文の動詞などの時制に下線を引かせ、そこにどういう意図があるのかをまとめさせるなど、個に応じた課題を行わせる教員の指導の工夫が必要である。

3 時間はあっという間に過ぎた。このように短い報告にまとめるには書き切れないほど多くのことを参加者で話し合えたことはよかった。

